

13日の金曜日の夜、パリでテロによって120名以上の無辜の人々が殺されたと言うニュースを聞き、恐ろしさと悲しみに身が震える思いでした。イスラム過激派のISグループがこのテロの「犯行声明」を出したと次の日に報道されました。サッカー観戦、ロック・ライブ鑑賞、家族や友人との食事など週末の夜の楽しい時間が切り裂かれました。息絶えた人、重症を負った人、また多くの負傷者が出てしまいました。おそらく犠牲者は若い人々だったでしょう。

同時に犯人も自らの身に爆弾を装着し、死を賭けてこの犯行に手を下したのです。彼らも若者でしょう。彼らは「神は偉大なり」と叫びながら犯行に及んだと報道されています。その声はイスラムの信仰の合言葉であると同時に、このような突撃をする恐怖を自身が封印するためのお経、呪文のような言葉に思えてなりません。マインド・コントロールされ、過激思想を信じたのでしょうか。

犠牲者、犯人ともに、失われた命はもはや取り戻せないのです。これまでに日本人も3名が殺されています。問答無用な、無差別なテロは、もはや狂気の暴力としか言えません。

ISの犯行声明は、シリアでの空爆への報復であるとしています。また、これだけの大規模な同時多発テロを行うためには、共犯者、協力者もいたことでしょう。そして、このテロを支持する声もネット上に出ているのです。シリアの反人道的政権、それがもたらす混乱、それに乗じて武装し、恐怖の支配を拡大したISに対し、当事者はそれを防ぐ手段が見つからないのです。



Sadad の正教の教会(シリア西部)

時々、BBC系の World Watch Monitor というネット上のニュースを見ますが、シリアを始め、イスラム圏での人権無視、女性差別、暴力、キリスト教会への迫害など、次々と報道されています。今日もジハード(聖戦)と称して、キリスト教徒を背教者と見なし、牧師殺害、教会破壊を目論む勢力が3 kmほどの距離にいて、ザダドの町を包囲しているとのこと。多くの人々が避難して、15000人だった人口が数100人というこの町の教会の様子が報道されていました。すでに殺害された家族や、人質にとられている人もいるとのこと。牧師の

Luka Awad氏は「We plead with the international community to put an end to this war. Our people have been the victim of a genocide a hundred years ago in 1915.」(国際社会がこの戦いを終わらせてほしい、我々は1915年の100年前からの大虐殺の犠牲になっている。)と話しておられます。

同じ人間として、キリスト者として、どのような介入ができるでしょうか。無力であると感じます。イスラム教は平和の宗教だと信じるイスラムの人々の団結がまず、求められるでしょう。そして、それを信じ、支える様々な考えの人々は支援することができます。歴史の検証も必要でしょう。近代文明を誇る者の驕り、軍事力に頼る暴力主義を排除しなければなりません。無人飛行機、ドローン、ミサイルなどによる爆撃は無差別テロより、さらなる広範囲に、テロと同じ結果を生んでいます。報復の連鎖を断ち切らなければなりません。

ヨーロッパは、シリアからの難民を受け入れる人道的配慮に大きな負担を払っています。一方、ISを打倒、掃討しようと空爆を続けています。「テロには屈しない」と願っています。ヨーロッパの人々が懸命な努力をしていることは知っています。けれどもテロをなくすことはできないでしょう。テロはある意味で個人的な犯罪、暴力です。人と人の交わりによって信頼関係が生まれれば、対話ができるでしょう。相互の理解、和解が生まれるでしょう。

報道でよく見かけるイスラムの女性たち、また、ISの兵士たちは黒い色を纏っています。それは、まるで喪服のように思えてなりません。彼らが常に「死を身にまとい、死を想起し」ているのではないかと、つい思ってしまいます。